

田島明子（編著）

障害受容からの自由 —あなたのあるがままに

田 中 順 子

（川崎医療福祉大学，作業療法士）



現在の作業療法界で健筆ぶりをみせる田島明子氏が、また刺激的な1冊を刊行した。田島氏は一貫して「障害受容」「存在肯定」をキーワードに、示唆に富む論考を展開されている。『障害受容再考—「障害受容」から「障害との自由」へ』（三輪書店）でその思想を押し進めているが、本書はそのさらなる延長線上に位置づけられる。

本書の着想は、「障害受容」という言葉の使われ方に疑問をもった氏が、「障害受容について/から考える研究会」（2012年発足）を立ち上げたことがきっかけである。本書は、その研究会のメンバー5名の論考と他3名の寄稿からなり、コラムやインタビュー等も盛り込まれ、たいへん読みやすく配慮されている。巻末にはまとめとして田島氏が個々の論考を振り返り、「障害受容」について4つの提言にまとめている。

執筆者は障害当事者、当事者家族、支援者、支援者でもある当事者家族、そして当事者家族とかかわってきた研究者から成る。この

ことから、田島氏の研究者としての誠実な議論を意図した態度がうかがえよう。

当事者たちの言葉はいずれも示唆に富み、揺れ動く複雑な心中を、驚くばかりに率直に表している。そこには、社会にはもちろん、支援者にさえなかなか言いづらい、もしくはその機会を逸した一人ひとりの思いが凝縮したかたちで吐露されている。それらには、本当のところは誰かに聞いてもらいたかった、悔しい苦い思い出も含まれている。そういった意味で、読む側に襟を正させる何か気迫のようなものさえ感じさせられるのである。

この本は「障害受容」という概念の受け取りようが、実に人それぞれであることに気づかせてくれる。そして、その概念を定義づけたり一般化したりすることの困難さや、安易な定義づけの危険性にも気づかされることとなる。

田島氏は前掲書で、障害者の内的な障害観（感）と「障害」を否定する一切の外在的な障害観（感）との交通可能性にこそ再生

へのエネルギーが動き出す何かがあると述べている（『障害受容再考』p170, p180）。言い換えると、当事者自身の障害観（感）をそのまま真摯に受け止め支持する態度こそが、支援者側に必要であるということであろう。それを可能にする唯一の方法が、支援者たるわれわれOTのほうから当事者や当事者家族に歩み寄り、その障害観（感）・障害受容観（感）を積極的に理解しようとする態度をもつことなのではなかろうか。その意味で、当事者の本音が語られている本書の存在意義は非常に大きい。

もしも、これまで「障害受容」という言葉にひっかかりを感じたことがあるならば、いやひっかかりを感じたことがなくとも、ぜひとも本書を手に取り、さまざまな声を聴いていただきたい。

〔四六判 224頁 1,800円＋税〕
シービーアール 刊
☎ 03-5840-7561